

---

# 異世界旅行記

月夜 影

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界旅行記

### 【Nコード】

N0656H

### 【作者名】

月夜 影

### 【あらすじ】

異世界へ連れて来られた主人公が旅行気分で異世界をめぐる話。

## ブローグ

「今日も学校かよ。」

「学校なんて3日に1日でもいいのに。」

と言いながら俺は学校へ向かう。

「よし。君にしよう。」

と、声が聞こえた。

「何だ？」

そのとき、視界が闇に覆われ、俺は気を失った。

## 第一話

俺は、目を覚ました。

「此処は何処だ？」

「おめでと〜！」

「何だ？」

「あなたは何と！異世界へ行けることになりました！喜んじやってください。」

「ハア？」

「ええ！異世界ですよ！異世界！そこにただで行けるんだから喜ばないとだめでしょう！」

「いきなり異世界って言われてもこまるんだけど・・・。」

「とりあえず、此処は何処だ？」

「此処は世界の狭間。神が住んでいる所です。」

「俺は如何して此処に拉致されたんだ？」

「むう。拉致なんて酷い言い方しないで欲しいです。あなたを連れて来たのは、さっきも言った通り、あなたを異世界へ送るためです。」

「如何して俺が異世界に行く事になってるんだ？」

「なんと！あなたは神たちによる抽選の結果、見事！当選したのです！」

「どんな抽選方法だ？」

「神様の気まぐれです。」

「全然平等じゃねえ。俺、不幸じゃん。」

「いえいえ。当選したのですから、幸運ですよ。あなただって異世

界へ憧れていたことくらいあるでしょう？夢が叶うのですから、やはり幸運なことです。」

「と言う訳で、一名様異世界へご案内します。」

「ちょっとまって！俺は行くななんて一言も言っていないぞ！」

「安心していいですよ。ちゃんと生きて行けるよう用意されてると思いますから。………たぶん。」

「おい！今、最後にたぶんっていったろ！冗談じゃねえぞ！いきなり連れて行かれて、その上即死亡なんてことになったら呪ってやるから覚悟しとけよ！」

「あゝもう。煩いですよ！大丈夫だっていつているじゃないですか！大人しく異世界へ行ってください！」

そして、俺はまた気を失った。

## 第一話（後書き）

不定期更新です。

（今後のこと、一切考えていない為）  
連載って結構難しいですね。

いえ、小説自体書く事が困難です。  
できれば、何か意見をください。

## 第二話

「此処はどこだ？」

俺は目を覚ました。

俺は神様の気まぐれなんていうもので選ばれてよく分らないまま異世界へと飛ばされた不幸な高校生「風魔 宗助」(ふうま そうすけ)だ。

しかし、よくよく考えてみると、不幸なのは今に始まったことではなかったような気がする。

俺の一族は、忍者の末裔で、今でもそういう術を鍛錬している。

俺も例外ではなく、幼い頃から忍術を教わった。

しかし、俺は友達と普通に遊ぶのが好きだったので、あまり時間をかけなかった。

けっしてサボった訳ではなく、幼い俺は、さつさとすべて終えてしまえばいいと思ったようで、結構時間のかかる術もすぐに習得して



しまった。

そのせいで、周りは天才だと騒ぎ、いろいろなことを教えた。忍術、秘術、奥義、剣術、体術、さらには気合術なんていうものまで。しかし、そのすべてを俺は習得してしまったようだ。

今考えると、周りは面白半分だったようだ。なぜなら、他にも読唇術や読心術、速読の仕方、ハッキングにピッキングなど犯罪っぽいものまで教え込まれていたからだ。

しかし、そのおかげで学校生活はとても楽しかったが……。

さて、自己紹介もここらで終わりにして、ぼちぼち動き始めるとしますか。

と、いう訳で、俺は辺りを見回した。

どうやら森の中のようだ。

「ピリリリリリリ」

携帯が鳴った。

「もしもし。」

「あ。もしもし。きこえますか？」

変な空間で会って、俺を異世界へ送りやがった張本人の声が聞こえた。

「聞こえるけど。」

「何か用？」

「はい。とりあえず無事に着いたようなので連絡をと思ひまして。」

「そうか。」

「はい。それから、あなたがその世界の言語や文字を理解しているようにしておきました。心おきなく楽しんでください。では、また機会がありましたらご連絡させて頂きます。」

「ぶつつ。ツーツー。」

そういつて電話は切れた。

「ま、来ちゃったもんは仕方ないから楽しむとするか。」

とりあえず人に会おうと思い、俺は足を進めた。

## 第二話（後書き）

やっと書けました。

1話書いただけで、満足感と達成感がいっぱいになって、次話なんかどうでもいいやと思ってしまっ自分ばダメ人間なんでしょうか。ですが、自分に鞭を打ちつつ、頑張って次話を書きたいと思います。では、また次回お会いしましょう。

### 第三話

俺は今、森の中を歩いている。人がいそうな気配が微塵もない。

「どうせなら人が近くににいる場所に送って欲しかったぜ。」

そうばやきつつも俺は歩き続けた。

しばらくすると、ようやく村を見つけた。

「やれやれ。やっと情報が得られるぜ。」

そして俺は入り口であるだろう門へ向かった。

「すみません。」

俺は門番に話しかけた。

「何か用か？」

門番が聞いてきた。

「村の中に入れてくれませんか？」

「ここから先はレスティア王国だ。入国の目的は？」

「えーと・・・実は俺はいろいろな所を旅しているところで、ここにたまたま通りかかったので、観光などをしようと思ひまして・・・」

「わかった。入国を許可する。それから、ギルドカードは持っているか？」

「ギルドカードって何ですか？」

「おいおい。ギルドを知らないのか。ギルドはヴァミュー大陸全土共通だぜ。お前どこに住んでたんだ？」

「え〜と・・・」

「まあいい。とりあえず入国しろ。その後ギルドについて説明を聞け。わかったな。」

「はい。わかりました。ありがとうございます。」

そう言って、俺は門をくぐった。

「とりあえず言われた通りにギルドに行ってみるか。」

### 第三話（後書き）

お久しぶりです。

本当に申し訳ありません。

自分は本当に駄目人間です。書く気力を無くしてしまい放置してしまいました。

連載を続けている方々をホント尊敬します。

また次はいつになるかわからないですけど、投稿できるよう頑張りたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0656h/>

---

異世界旅行記

2010年11月18日10時51分発行